

ショートフィルム 15分程度

# 「折紙部へようこそ」

脚本 大岡俊彦

折紙は子供の遊びだと思っていた高校生、  
神谷は「現代折紙」の魅力を知る。  
千羽鶴を折る事件で、正式に折紙部の入部  
を決めた。

## 登場人物

神谷（15） 高校生。表面的な付き合いの  
周囲に退屈していた。

茶美（15） 折紙部部长。分厚い眼鏡。

山本（16） 折紙部。関西弁。

谷（16） 折紙部。メンヘラ系。

高見沢先輩（17） サッカー部主将。  
美也子（16） 女子高生モデル。

女子A

○××高校の教室

終了のチャイム。

神谷（15）「……」

窓の外を退屈そうに見ている。

テストの成績は69点。それを紙飛行機に折り始める。

肩組んで仲良しアピールし、自撮りする女子たち。

神谷NA「表面だけ楽しそうにして、楽しいのか？」

写真撮り終えたらすぐ離れる。

神谷NA「そっちが本当の距離だろ？」

漫画雑誌と一緒に見る男子たち。

神谷NA「話合わせてるだけだろ？」

窓から紙飛行機を投げる。

神谷「……（ため息）」

茶美の声「こらー！一年C組神谷広！」

窓の外には、紙飛行機を拾った、茶美（15）。

神谷「拾わなくていいよ！」

茶美「アンタ、折紙の才能あるよ！」

神谷「……は？」

○同、折紙部、部室内

茶美「基本は折鶴なのよ。できる？」

神谷「いちおう、日本人だし」

ささっと折り始める神谷。

折り上がった鶴と飛行機を見比べ、ほれぼれする茶美。

茶美「一点に集まる所が丁寧。直角がちゃんと取れる」

神谷「……ていうか、『折紙部』ってなんだよ。子供の遊びだろこんなの」

茶美「……と思われて創部十年。潰れそうなので、幽霊部員でいいんで、メンバーに入ってくれない？」

神谷「……」

茶美「あ！（わざとらしく）資料取って

こなきや！ でも重い本ばつかで男子の力が欲しいなあ……（ちらりと見る）」

神谷 「どこ？」

茶美、鍵をすかさず渡す。

○廊下、資料室前

鍵を開けようとする神谷を、茶美、山本（16）、谷（16）の三人が覗く。鍵を開けて中を見た神谷、驚く。三人、ガッツポーズ。

○資料室内

そこに鎮座していたのは、ケース入りの「龍神」（添付資料）。全高1メートル。その精巧さは芸術品だ。

神谷 「なんだ……これ……」

思わず近づいて確かめる神谷。他にも彫刻と見まがうような、立体物を折紙でつくった作品たち（添付資料）。すべて「不切、正方形紙」と添え書き。

茶美 「切れ目なし、正方形の紙から折り上げたって意味」

うしろから覗いた三人の顔。

神谷 「……嘘だろ。……これ、本当に折紙？」  
三人、満面の笑みでうなづく。

○タイトル「折紙部へようこそ」

音楽にのせて、さまざまな作品たち。

○折紙部部室内

机の上の資料と神谷の鶴。

茶美 「ドッキリでごめんね！ ウチの伝統なのよ。でも奪われたっしょ、魂」

神谷 「いや、……マジ、なんつうか……」

茶美 「全部伝説の先輩の作品。私たちはあれを目指してるの。あ、紹介するね。山本

くん！」

山本、黙々と折紙を折っている。

茶美 「谷さん！」

谷はメンヘラ系女子。腕をまくって、無数のリストカット跡を見せる。

谷 「山折り、谷折り、山折り、谷折り」

神谷 「……（ドン引き）」

山本 「出来たで！」

神谷 「首が二つの鶴。」

神谷 「え？」

山本 「首が三つの鶴。五つの鶴。九つの鶴。」

山本 「足も生やそうか！」

二本足の鶴。スタコラサッサと走る鶴。体育座りする鶴（添付資料）。

神谷 「なにこれ……なにこれ……！！」

山本 「全部鶴のバリエーションで折れるんやで？」

茶美 「山本くんは、たまに千羽鶴のバイトすることもあるの」

神谷 「いやそれ駄目っしょ」

女子Aが走って来て部室に乱入。

女子A 「大変大変！ 茶美！ 折紙部の協力要請！」

茶美 「なに？」

女子A 「サッカー部の高見沢先輩が、骨折して入院だって！」

茶美、谷「ええええええ！」

動揺して立つ二人。

女子A 「で、女子みんなで千羽鶴折ろうと思ってる……」

茶美、谷「任せなさい！」

神谷 「その千羽鶴、これで折ったら面白くないね？」

全員 「？」

神谷 「足骨折したんなら、足の生えた鶴のほうがいいっしょ」

茶美 「お前天才か！」

× × ×

神谷の折る手先。

神谷 「意外と難しい。あんなこと言うんじ

やなかった……」

山本 「最初はそんなもんそんなもんで。腹をもう少し余裕を持たさな」

神谷 「？」

山本 「一枚の紙に戻す。たくさん折り目。」

神谷 「どこが腹？」

神谷 「どこから見ても理解できない。」

神谷 「茶美、わかる？」

と女子を見ると、黙々と「足の生えた鶴」が大量の山に。

神谷 「すっげ！」

茶美 「話しかけないで（怖い目）」

谷 「黒魔術。黒魔術」

谷はリストカットして、手首の血を紙にしみこませている。

山本 「ばれたらドン引きされるからやめとき！」

○夜、折紙部部室内

鶴を数える谷。

谷 「三百四十……五。あと六百ちよい！」

茶美 「あ、今日はありがとう神谷。もう帰っていいよ。幽霊部員だからもう来る必要はないけど、時々は来てね」

神谷 「いや、このまま中途半端なのは嫌だよ。言い出しつぺ俺みたいになってるし」

グーとお腹が鳴る茶美。

山本、谷、茶美、無言でじゃんけん。

谷の負け。

茶美 「神谷の分も買うんだよ！」

× × ×

みんなでカップラーメン食べながら。

神谷 「何か部活って楽しいね！」

茶美 「でしょ？」

大きな白紙が机の上に置かれたまま。

神谷 「なんで折らないの？」

茶美 「……はまんないんだよね」

神谷 「？」

茶美 「(紙をさしながら)羽、頭、尾。…問題は足。両足を同じにするなら簡単だけど…」

神谷 「え？ 何をつくろうとしてんの？」  
茶美 「…(真剣なまなざし)」

○別の日、ユニクロのような服の量販店

にて、服を選ぶ神谷。

神谷 「あれ？ 茶美？」

バイトしている茶美。と、すごい勢いでTシャツをきれいに畳む。

(『Tシャツを2秒で畳める技』。添付資料参照)

神谷 「え！」

開いては畳み、また畳む茶美。

神谷 「(先生の真似をして)わが校の生徒は勉学を本分とし、副業などを禁止しており…」

茶美 「神谷！ ここ絶対ばれないと思ったのに！」

神谷 「それ」

茶美 「？」

神谷 「どうやってんの」

茶美 「ん？ ああ、折紙と一緒にだよ？」  
手癖のようにTシャツを折り畳む。

神谷 「???」

茶美 「よくみて、表が裏に、裏が表になるの」

神谷 「???」

茶美 「(ゆっくりやりながら)表と裏が入れ替わる。折紙の魅力ってそこよね」

神谷 「表と…裏…」

茶美 「あ！」

神谷 「？」

茶美 「今なら折れる！ 手伝って！」

○夜、部室

大きな紙を持ち、二人で対角線を折る。

何度も何度も折って、折り目をつけては開く。

神谷 「まだ折るの？」

茶美 「この細かい部分が、細くて強い足になる。神谷、やっぱ才能あるよ。正確」

神谷 「茶美も手小さいのに、丁寧だな」

茶美 「神谷の手、意外にゴツイね（笑）」

神谷 「……」

× × ×

茶美、いよいよ細かいところに入るが、神谷はウトウトし始める。

× × ×

寝た神谷を起こす茶美。

茶美 「帰るよ」

神谷 「え？ あれ？ ……あ」

出来上がった、美しいオリジナルの鶴（添付資料）。

神谷 「スゲエ！」

思わず立ち上がり、詳しく見る。

左右の足が非対称で動きがある。

神谷 「俺……お前のこと誤解してた！

お前すげえよ！ ちんちくりんで眼鏡の、どこにこんなきれいな心があるんだよ！」

茶美 「ほめてんの？ けなしてんの？」

神谷 「ほめてんだよ！ 本当のお前がここに  
いるんだ！ 美しい心の茶美が！ これ  
なら高見沢先輩も見直すよ！」

茶美 「……ありがとう」

○翌日、病院前

眼鏡を外し化粧をしてきた茶美。谷。

神谷 「え？ え？」

山本 「二人ともマジやで」

○廊下、病室の前

千羽鶴を手に、緊張して入れない茶美。

神谷 「なにビビってたんだよ。らしくねえな」

茶美 「やっぱ無理……今時千羽鶴って……」

神谷 「ただの千羽鶴じゃねえだろ。お前の鶴ひとつで千羽分あるだろ。「千羽鶴だよ」折紙部の千羽鶴は全部が足生えている。頂点に茶美の折った大きな美しい鶴。」

○病室

茶美 「お、折紙部と一年A組女子、合同の千羽鶴をもって来ました！」

しかしすでにたくさんの千羽鶴が。

茶美 「え……」

美也子（17）「なにまた？」「苦労様」

と、慣れた手つきで受け取る。

美也子 「ヨッシー。また千羽鶴」

とベッドの高見沢の隣に座ってべたべたする。

山本 「モデルやってる二年の美也子さんや。付き合ってたんか二人は」

高見沢 「足生えてる。キモ」

茶美 「……」

いたたまれなくなる茶美。

神谷、切れる。

神谷 「キモイはねえだろ。取り消せよ！」

高見沢 「は？」

神谷 「足折ったっていうから、足生えた鶴にしたんだよ！ 治りますようにって！

折紙部や女子の思いを受け取れや！」

茶美の鶴。

神谷 「その足何回折ったと思ってるんだよ！ 強くて二度と折れないようにってスゲエ折り込んでんのに！」

茶美 「（制止して）」「ごめんなさい。……」  
方的に押し付けました。キモくてごめん  
なさい」

神谷 「茶美もあやまんなよ！ 好きな思  
いは事実だろうが！ もういい！（鶴  
を奪って）じゃあこの足折ってやる！

二度と走れなくなれ！」

高見沢 「やめろよ」

神谷 「……」



高見沢 「マジ、効きそうだから」

○河原

とぼとぼと歩く4人。

茶美 「……」

神谷 「茶美、コンタクトのほうがいい

いよ。その方がモテるって」

茶美 「……」

神谷 「すいません、いろいろ……」

茶美 「……」

神谷 「でも、あれが本当の俺かも。表だけ取り繕ってるクラスが、俺ずつと嫌だったんだよ。なんか今日は、表と裏が、ひっくり返っちまったよ。折紙みたいに」

茶美 「……折紙みたいに？」

神谷 「俺も、茶美みたいに本当の自分、出していききたい」

茶美 「……毎週月水金。部費が足りなくなったら、千羽鶴かユニクロでバイトね」

神谷 「(うなづく)」

鞆にいたままだった、テストの紙飛行機を空に投げる。

通りがかった先生の足下に。

先生、テストを開いて。

先生 「一年C組神谷広！」

神谷 「やべ！」

逃げる4人。

END